

## 難局を救った言葉 「死ぬ気で生きなさい」

本年も終戦記念日を迎えた。気に入らない。そして素直ではない。何がって？ 終戦記念日と言う呼び方だ。敗戦日と言え方がいいのだ。物量と民主主義の米国に負け、今は直接文句が言えないから左翼で自民党支持者の生産者に言わせていると……。

当時の戦争遂行責任者である軍司令部と現場の兵士とは、戦争そのものにかんがりのずれが生じていたことは、読者の皆様もご存知であろう。農業と関係のない話だと思われるが、果たしてそうだろうか。どの政党の政権になっても、戦争も農業も結局は生き残りをかけた戦いである。勝ち残り、面積の拡大が進めば、政府予算配分を面積や作物に応じてより多くいただける。一方、面積の拡大が進まない者は、時間の経過とともに廃れていくのは戦後の短い歴史を見ても、間違いない事実である。そして都市に吸収された者は直接国家予算などという存在からはかけ離れた環境になる。最悪の場合には本当の生活のための補助金が市町村を通じていただくことになるかもしれない。一番見苦しいのはこのような元農村社会出身者が農業批判を行う場面である。自分達が農業社会

で生き延びられなかったので、今の農業社会を批判することは、みじめで恥ずべき行為である。

人を殺し合う戦場では自分がより強くなり、相手を打ちのめし、生き抜く意思を持つことが当然だが、相手が自分よりも弱ければ相対的に見て自分の優位性が高くなってしまふ。そんな低次元の産業がこの日本に存在するのかもしれない。

私の趣味はスカイスポーツである。訓練は旧日本海軍の一式陸攻で実戦を経験され、8月17日(15日ではない)の朝まで特攻の訓練を行っていた吉田勝三教官に教わった。その後教官は、陸上自衛隊の札幌・丘珠でヘリコプターの隊長、退官後は航空大学校で新人を教育されていた。その吉田教官に質問をしたことがある。どの様な者が空で死んでいくのか。真面目に質問したつもりであったが、答えは調子抜けするものであった。「飛行機乗りで死んで行くのは後先を考えないイケイケドンドンの無鉄砲者、もしくは敵の銃弾をかくぐぐ

素直な態度と心で営農します  
……って、らしくない!?

Vol.19



宮井 能雅

1958年3月、北海道長沼町生まれ。現在、同地で水田110haに麦50ha、大豆60haを作付けする。大学を1カ月で中退後、農業を継ぐ。子供時代から米国の農業に憧れ、後年、オーストラリアや米国での農業体験を通して、その思いをさらに強めていく。機械施設のほとんどは、米国のジョンディア代理店から直接購入。また、遺伝子組み換え大豆の栽培を自ら明かしたことで、反対派の批判の対象になっている。年商約1億円。

Illustration by Kazushige Akita

れない下手な搭乗員」。

逆に誰がどの様な者が生き残れるのか聞いてみた。やはり驚きの答えであった。「要領が良い奴、戦闘が始まると雲を見つけて逃げ込み、戦闘が終わる頃を見計らって出てくるんだ。そんな奴の多くは戦後、民間航空会社に行っただ」。

正直、海軍でもこんなものかと落胆したが、吉田教官は最後に「卑怯な

オレにも  
言わせる!

北海道長沼発  
ヒール宮井の憎まれ口通信

生き方ではない、それも戦いの一つである」と現代社会でも通じる様な意味深い話をされたことを思い出す。さて、農業社会ではどうだろうか。真剣勝負で生きている者はどのくらいいるのだろうか。四国の祖母からは「死ぬ気で生きなさい」と言われた。私もいろいろな難局に出会った場合に、よくこの祖母の言葉を思い出すことがある。

特攻隊員のように必ず死がやってくると思悟を決めれば、人生思い切ったことができる。ただしイケイケドンドンではだめだ。農業はすべて計算し尽くされた上で営農される職業であるべきだが、現実には本年の様に今年の3倍の降水量や日照不足では、神のみぞ知る状況になる。ただし、どのような結果になったとしても投資を忘れてはいけない。本年の様な不安定な年にこそ伸びる生産者と伸びない生産者の差が出てくる。農業に投資を考えない、考えなくともできると思う者は、ここまで読んでケツまくってどこかに消えていただいても結構です。今年も儲からないから、何も投資をしないでは、その他大勢と同じ結果になる。

今まで成長した、そしてこれから成長する生産者は99%のチキン生産者（器が小さいと言う意味）とは違い、このような時に農地を増やし、

新しい品種は20%収量が多いので乾燥施設を増強しようと考ええる。すべての農業が同じとは思わないが、北海道の転作田で麦と大豆を栽培する生産者に必要な物は投資であることは間違いない。では必要な物は何か。**消費者の声**かもしれない。

我々が栽培して収穫する大豆、麦は播種する前に、農林水産省と契約を結んでいる。その契約内容の中に安全に關した法律遵守事項は存在しても「消費者の意見を聞け! 地産地消が大切だ! GMはダメだ!」なんてことは書いてない。このような直接、農作物に關係しない作業行為をすべて農協などの集荷業者に委託するとある。つまり国との契約上、農産物の販売、集金、消費者へのリップサービスは生産者が行なわなくとも良いと理解できる。それに良く考えてほしい、大豆、麦農家が「自分の大豆、麦が美味しい」なんて発言聞いたことないでしょうか?

野菜やコメと違い、我々の大豆、麦は直接消費者の口に入ることはなく常識的に考えて、加熱、加工されて消費される。つまり、もし我々が注意することがあるとしたら、それが加工に適した農産物であるかどうかである。ところが世のおバカ大豆、麦生産者は農業生産者として一人前ではないので、消費者、消費

者と言う念仏を唱えることになる。  
**どういつわけ農政が突然変異してしまう北海道**

伸びる生産者を批判的にとらえる者には共通点がある。農業生産者としては「?」が付く者が多く、農業社会的に重要なポジションにあるかどうかは關係ない。具体的には、どう考えても返せない借金がある、しっかりと農産物が取れないので農産物収入がない、跡取りがない、いても……等々。そりゃそうだわな、昭和42年に祖父が他界した時は5haスタート、今では借地を含めて20倍以上になったことは面白くなく、ランチェスターの法則によれば、敵に圧倒的な勝利をするには3倍の兵力が必要とか。つまりその町の平均経営面積の3倍以上を持たないと安定経営には至らないとも言える。

またあいつはこーだ、あーだ、うまくいってないなどのネガティブ思考が得意な者がいる。気を付けた方がいい。こんな連中と付き合っても得るものは何もないどころか、**危ない伝染病**なので目と耳をふさいで対応しなければならぬ。今までは私に利益を与えてくれた方達の多くは、具体的に数字を使い農業が向上する方法を教えてください。

しかし、一番大切なのは素直な態度と心である。自分なりに評価すると、他人様の話を聞くようにしているが、明らかに損を与えることを求める、大馬鹿者や組織がもし存在するならば非常に残念である。

大豆、麦栽培は特別な能力は要らない。素直に実行すべきことをやるだけの話である。これは正直に言わせていただくと、優秀な農水の職員が考え出した農政を歪んでとらえる必要はない。ただ、その予算付けが北海道に來た段階で、国の農政に反してGM条例を作ったり、国民に何ら利益を与えない有機栽培を「促進する」などと発言する農政部や各市町村の態度は非国民以外の何物でもない。まるで大戦中のように日本人が日本人を必要としない環境を作り上げているかのようだ。

政府は大豆、麦に關しては絶対的な予算付けとサポートが存在している。余計なことを考えないで言われたことをやればそれなりの収入が保証される。それによって将来への投資をすることができる。その過程も子供達に見せることができ、広い大地に住めることこそが農業の一番の魅力である。

みなさんはどんな農業の魅力を語れますか? それはおバカなイケイケドンドン? それとも雲を見つけて逃げ込み要領良く生きますか?